

活かし、伝える

久留米大学生2名が

学芸員の知識と技を学ぶ

学芸員の資格取得のためには現場での実習が必修です。令和4年度は、8月17日から25日のうち7日間の日程で実施し、久留米大学の学生2名が実習にのぞみました。

実習では幅広い分野に取り組みました。〈歴史資料の取扱い〉では、古文書や古写真などを調査するにあたって確認すべき事項などを、実際に資料に触れながら学びました。

また、〈展示実習〉では、六ツ門図書館展示コーナーや有馬記念館で



実習の様子（歴史資料の取扱い）

の展示会開催に向け、資料の梱包や解説文の作成など、現場ならではの実技を経験しました。

そして、〈広報実習〉では、〈展示実習〉で学んだことをもとに、有馬記念館公式フェイスブック用に展示品紹介の投稿文を作成し、見どころを伝えました。その他、出土品整理や文化財の写真撮影など学芸員に必要な技術を学びました。

実習生からは「資料ごとに取り扱いが異なることを学んだ」、「展示会開催までの工程の多様さに驚いた」といった感想ががかりました。

実習生2名とも、実技の要点がつかめるまで何度も挑戦してみんなど、意欲的に実習に取り組んでいました。



実習の様子（出土品の整理）

戦争の記憶を伝える千人針

～久留米市の戦争資料を大学教育に～

西南学院大学非常勤講師 平川 知佳

西南学院大学国際文化学部では、「戦争を歩く、戦争を記憶する」をテーマに、戦争に関する知識を学び、戦争について考えることを目的とした授業を行っています。

そこで私は、久留米市における「女性たちの銃後活動」に焦点をあてたお話をしました。その中で、久留米市教育委員会所蔵の戦争関連資料を取り上げました。

紹介した資料の中でいちばん学生の興味を引いたのは、千人針が施された腹巻です。ぴしりと規則正しく並んだ「玉留め」には、「弾を止める」という意味があり、弾丸よけのお守りになるように、千人がひと針ずつ刺して完成させたとされています。ひと針ひと針に込められた思いを想像すると、胸がいっぱいになります。

私自身は、幼い頃より、祖母や知り合いの方など

から、このような千人針のことをはじめ戦時中の思い出を聞くことができていましたが、今の学生の中には、「千人針を知らなかった」という人も多く、戦争や戦時中の暮らしのことを伝えてくれていた人の存在が、身近でなくなってきたことを感じました。

戦争の記憶を伝承していくためには、「モノ（資料）に戦争の実相を語ってもらうこと」が、これからますます重要になってくると思います。

文化財収蔵館の方々には、これからも戦時中の資料をはじめたくさんの久留米に関する資料を大切に保存していただき、後世に残して欲しいです。



千人針腹巻